

七月廿四日。前田利家、京大德寺塔頭興臨院に、先考利春の爲百石の地を寄進す。

【國初遺文】

一九〇五

紫野大德寺塔頭興臨院領之事、如先規能州鳳至郡之内諸岡村以年貢且百石、爲休嶽道機新寄進、永代可致所務者也。猶今井宗久・山上宗二へ申渡候。仍如件。

天正十三

七月廿四日

前田又左衛門尉

利家 在判

大德寺興臨院

納所御中

【國初遺文】

一九〇六

追而申候。宗二へ如申含候自今以後此方へ音信之義、下々迄も一切停止候旨、堅可被申渡候。并彼寺毎年勘定之義も、爲兩人明鏡に可被相究候。然者行々義も、尙以相當可馳走候。

能州鳳至郡之内興臨院領百石代官之義、任兩人異見、從

此方所務等申付候。物成七十石宛毎年可運上候。當秋者七十石に金十兩代之由下々者申候條、其分上申候。此等趣、興臨院可預御心得候。猶口上ニ宗二へ申渡候。恐々謹言。

天正十三

七月廿四日

前田又左衛門

利家 在判

今井宗久

山上宗二 床下

七月廿八日。前田利家、越中阿尾城主菊池武勝に、その和を請ひたるを容れて誓書を與ふ。

【菊池文書】

一九〇七

天罰起請文之事

一、今度此方へ同心趣□□□些如在有間敷候。萬一表裏候者、申顯可及斷候。右忠節をいたづらに成候而、父子三人切腹爲左申間敷事。

一、以書付申談知行方之事、以來共相違有間敷事。縱知行方計策被遣候共、其方へ申談候知行方、某及御斷、知

行させ可申候事。

付、自然此調儀ほぐれ候は、右如申談、於當國急度かへ可申事。

一、秀吉様御判形、縦時日延候共、頂戴させ可申事。

一、其方居城、以來共相違有間敷候事。

付、其方法躰之儀候間、如此間私宅ニ可被居事。

一、湯山か、守山か、兩所に一所可申談事。

右之條々、若於僞者、上者梵天帝釋、下四大天王、惣而日本國中大小神祇、取分愛宕白山・八幡大菩薩、日光・月光、扱者氏神之御罰籠蒙、今生に而者白癩黒癩病受、來世ニ而者無間ニ可墮在者也。仍起請文如件。

前 又左

天正十三年七月廿八日

利家 血判

菊 右入道殿

同 十六郎殿

御宿所

八月五日。前田利家、鹿島郡大吞郷百姓に、羽

柴秀吉の將に來著すべきを以て、その漁獲せし魚類を毎日金澤に送附せしむ。

【桑原文書】

鹿島郡

一九〇八

くわんはく様御動座にて、浦々へさかな之事申付候。當浦之儀無由斷申付、船より上候者、則肝煎に而も、急度夜中、來十二日より毎日尾山へ可相届候請取を以令算合候。無沙汰之在所、急度可成敗者也。

天正十三年

八月五日

前田

利家 在印

大のみ百姓中

八月七日。前田利家、能登の青木善四郎等に、前田利勝の河北郡鳥越に戦勝を獲、且羽柴秀吉の先鋒已に越前に入りたることを告ぐ。

【温故足徴】

一九〇九

如書狀、今度於鳥越表途一戰、孫四郎手前にて切崩、藏介馬廻隨分之者數多討捕、さし物以下迄追落候。仕合可御心易候。御動座彌必定にて候。御先勢はやく越前迄出申候。其元機遣も五三日中たるべく候。由斷有まじく